

ある人の死がなぜその人自身にとって悪いのかという問題は、現代の死の哲学において中心的な問題である。この問題について、剥奪説は、ある人にとっての死の悪を「もし死ななかつた場合に得られた福利の水準と、現実を得られた福利の間の反事実条件的比較」によって説明する（Bradley 2009, Feit 2016 など）剥奪説は、死の悪の理論について標準的な地位を確立しつつあるが、先回りや不作為などさまざまな問題を抱える理論でもある。そうした問題について、剥奪説の支持者はさまざまな解決を提示しているものの、いまだ決定的な解決は得られていない（Feit 2015, 2017, Hanna 2016, Purves 2019 etc）。

一方、ピッチャー=ファインバーグ説（PF 説）は、死の悪を「その人が生前にもっていた欲求が、死によって挫折すること」によって説明する理論であり、一部の論者によって根強く支持されてきた理論である（Pitcher 1984, Feinberg 1987, Luper 2004, 2007）。PF 説は、「死がいつ悪いのか」や「死後の出来事が死者にとって悪いことはありうるか」といった主要な問題（と関連する問題）について、標準的な剥奪説の応答とは異なる回答を与え、剥奪説の問題点を回避しうるため、有力な代替候補となりうるように思われる。

しかしながら、両者が本当に対立しているのかどうかは、明確ではない。なぜなら、第一に、剥奪説は通常、福利の理論についてはコミットメントをもたない形で定式化されるため、PF 説と剥奪説を組み合わせることは許容されているからであり（Bradley 2009 p.51, Luper 2021 sec. 3.2）、第二に、PF 説側から見ても「死がどのような欲求を挫折するか」や「もし死ななければもちえたはずの欲求をどう扱うか」といった問題の処理のために、結局は剥奪説と同じのような反事実条件的比較を用いざるをえないと考えられるからである（eg. Johansson 2014）。だが、PF 説と剥奪説を組み合わせることは、PF 説の擁護にとって望ましくない。なぜなら、PF 説には通常の剥奪説にはない解決すべき問題点があり、これらに加えて剥奪説の問題点を全て引き受けることになれば、PF 説を選択する理由は大きく減退するからである。

この発表では、PF 説を、剥奪説を用いずに定式化する方法を検討する。第一に、死がどのような欲求を挫折するかに関しては、死と挫折した欲求を表す事態の関係を正しく把握すれば、反事実条件的な比較は必要がないことを指摘する。このような方法には、両者の因果関係に訴えかける方法などがありうるが、本論では、イエンス・ヨハンソンらが近年主張する「福利に不利な(adversely)影響を与える」という考え方（Johansson and Riseberg 2022）を援用する。第二に、死ななければもちえたはずの欲求の不充足に関しては、そのような可能的な欲求の充足を予め欲求している場合でない限り、そうした欲求の不充足が福利に影響を与えると考えるべきではないと論ずる。